

# 授業力の向上に係る校内研修の在り方（第一年次）

－県内公立学校の校内研修の実態調査と方法の提案－

調査研究チーム

## I 研究の趣旨

本県の児童生徒の課題の一つとして、全国学力・学習状況調査や福島県学力調査などから、学力向上、特に、思考力・判断力・表現力の育成があげられる。このような状況を受けて、福島県教育委員会は、「平成25年度全国学力・学習状況調査に係る福島県の結果」の中で、『『わかる・できる授業』をめざすとともに、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を高めるための学習指導の改善に取り組む必要がある。』と提言している。本教育センター（以下、教育センター）でも、『授業改善ハンドブック 新・授業の窓「授業をつくる16の視点」』（以下、『ハンドブック』）を作成し、各学校に授業改善を呼びかけてきた。児童生徒の学力向上、そして教員の授業力の向上のためにも、校内研修の充実が重要になってくると考える。

また、本県の教員の年齢別構成を学校種ごとに見ると、特別支援学校以外の学校種においては、40歳代から50歳代にかけての年齢層に分布が偏っており、特に小・中学校においては、教員の高年齢化が進んでいることが分かる（図1）。そして今後、これらの年代の教員の退職に伴い、新採用の若い教員が増加することが見込まれている。このような状況

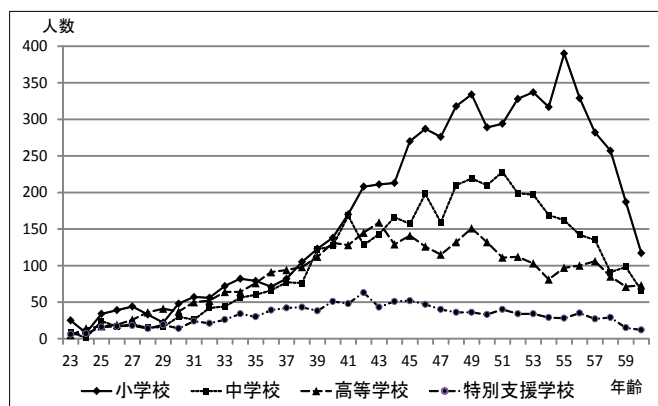


図1 福島県の各種公立学校における教員の年齢別構成（平成25年度）

から、教育活動の活性化、指導技術等の伝達のためにも、校内研修の重要性はますます高まってくると言える。

これらのことを踏まえ、教育センターでは、上記の研究主題を設定し、県内の公立学校に「授業力の向上に係る校内研修に関する調査」を実施した。そして、結果の分析から、授業力の向上に係る効果的な校内研修の在り方に焦点を当てて研究を進めた。

## II 研究の概要

### 1 授業力とは

本研究は、教員一人一人の授業力の向上をねらいとしている。授業力のとらえ方は、各研究により様々であるが、教育センターにおいては、授業力を各学校に配付した『ハンドブック』の四つの側面に対応させ、四つの要素からなるものととらえた。この四つの要素とは、単元全体の見通しを持つなど単元をつくる力である「単元構想力」、学習課題や活動を構想するなど1単位時間の授業をつくる力である「授業構想力」、授業中のコーディネートなど授業を進める力である「授業展開力」、そして、子どもの学びを振り返るなど授業を振り返る力である「授業評価力」の四つである（図2）。

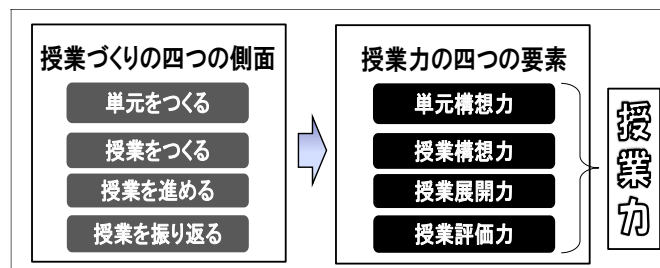


図2 授業力の四つの要素

授業力を向上させるためには、教員一人一人が自己の授業における課題を明確にし、PDCAサイクルに基づいて授業を計画、実践、評価、改善することが大切であると考えられる。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 調査結果の分析

県内の全ての公立学校に「授業力の向上に係る校内研修に関する調査」を実施し、次の四つの観点から分析を行う。(詳細に関しては、教育センター Web ページ「校内研修に関する調査結果」参照)

- ① 校内研修に対する意欲・課題意識
- ② 各種学校における校内研修の実際
- ③ 研究授業の実際と授業研究における悩み
- ④ 授業力の向上と校内研修との関わり

### (2) 授業研究の在り方の提案

文献等で先行事例を研究するとともに、教育センターで作成した『ハンドブック』を基に、授業力の分析方法、事前研究の持ち方、研究授業の参観、事後研究の効果的・効率的な進め方、自分の授業を見直し、改善する方法など、授業力の向上のための効果的な授業研究の在り方を提案する。

### (3) 実践的研究

年度当初の計画にはなかったが、夏休み以降、小学校 1 校が研究協力校となったために、研究協力校の授業研究を中心に、実践的研究を行う。

ただし、年度途中からの協力となるため、受け入れ可能な提案のみを検証する。

- ① 研究協力校への実践内容の提案と授業研究への参加
- ② 研究協力校における実践を通しての成果と課題の検証と提案の見直し

## III 研究の実際

「授業力の向上に係る校内研修に関する調査」の分析と研究協力校における実践等から見いだされたことを中心に、研究の実際について述べる。

### 1 「授業力の向上に係る校内研修に関する調査」とその分析

#### (1) 調査対象者

調査は 6 月に実施し、各学校から研修主任等 1 名、

教諭 4 名を選んで回答してもらった。回答者数は、次の通りである。

研修主任等	786名
教諭	3008名

### (2) 四つの観点からの分析

#### ① 校内研修に対する意欲・課題意識

研修主任等に対しては、「あなたの学校の教員は、授業研究に意欲的に取り組んでいたと思うか」「参加する授業研究に課題意識を持って取り組んでいたと思うか」と質問した。

教諭に対しては、「自分が授業者の場合、授業研究に意欲的に参加していたと思うか」「自分が授業者でない場合、授業研究に意欲的に参加していたと思うか」「自分が授業者の場合、課題を持って授業研究に取り組んでいたと思うか」「自分が授業者でない場合、課題を持って授業研究に取り組んでいたと思うか」と質問した。

結果は、次のようになった(図 3)。

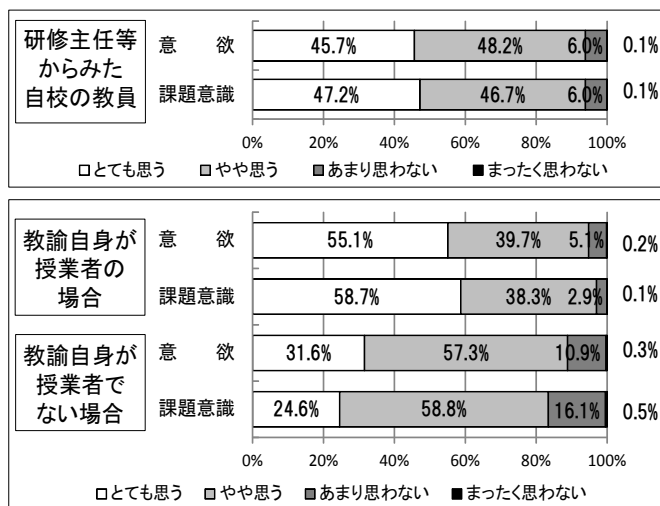


図 3 授業研究への意欲・課題意識

これらの質問において、8 割以上が「とても思う」「やや思う」という肯定的意見であった。多くの教員が、意欲や課題意識を持って授業研究に取り組んでいることが分かった。しかし、より積極的な取組を示す「とても思う」に目を向けてみると、意欲についても課題意識についても、自分が授業者である場合に比べ、自分が授業者でない場合には、約半分にまで減少してしまうことも明らかになった。

## ② 校内研修の実際

教諭に対して、「研究授業の事前研究会を重視していたと思うか」「研究授業の事後研究会が充実した会となっていたと思うか」「研究授業の参観方法や事後研究会の持ち方を工夫していたと思うか」「研究授業の参観方法や事後研究会の持ち方に改善が必要だと思うか」と質問した。

結果は、次のようになった(図4)。

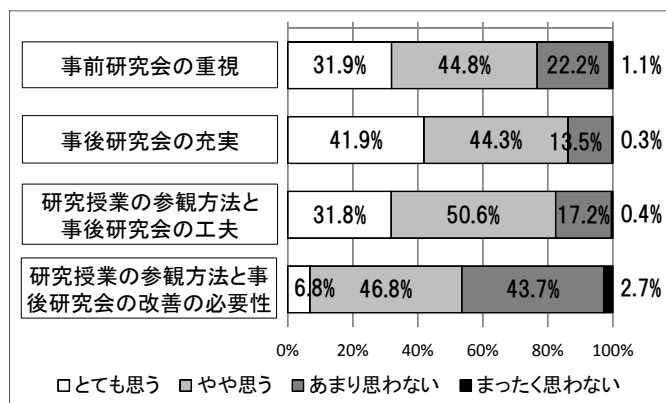


図4 事前研究会・研究授業・事後研究会の実際

肯定的な回答が多かったのは、事後研究会の充実、研究授業の参観方法と事後研究会の工夫の二つで、ともに8割を超えた。これらと比較すると、事前研究会の重視については、否定的な回答の割合が高くなっている。

また、研究授業の参観方法と事後研究会に関わる二つの質問からは、各学校で工夫はしているが、改善の必要性も感じているということが分かった。

## ③ 授業研究における悩み

研修主任等に対しては、「学校全体の授業研究を推進していく中で、どのようなことに困ったか(困っているか)」と質問した。回答者数が多かった順で見ると、1位が「時間の確保が難しい」、2位が「研修計画通りに進まない」、3位が「負担軽減と効率化の方法が分からない」という結果になった(図5)。

同様に、教諭に対しては、「授業研究に取り組んでいる中で、どのようなことに困ったか(困っているか)」と質問した。回答者数が多かった順で見ると、1位が「時間が実質的に確保されていない」、2位が「取り組む姿勢に差がある」、3位が「共通理解が不十分である」という結果になった(図6)。

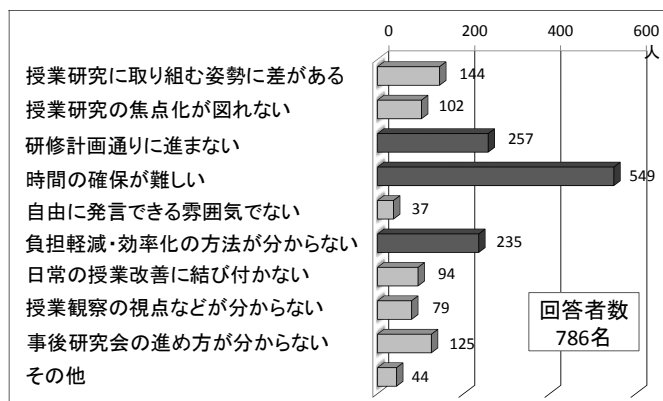


図5 研修主任としての悩み(複数回答)

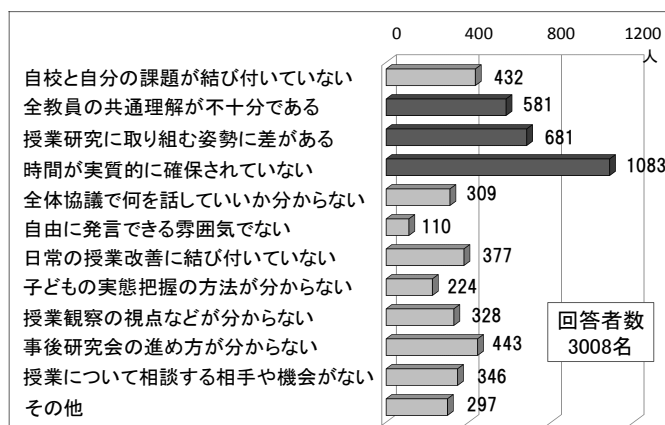


図6 教諭が授業研究に取り組む上での悩み(複数回答)

以上の結果から、選ぶ項目は違うものの、研修主任等、教諭ともに時間の確保に関して悩んでいることが分かった。特に研修主任等は、回答者の7割近くがこの項目を選んでおり、校内研修の時間をどのように確保するか、効率的に進めるにはどうすればよいかなどを模索している状況が見られた。

## ④ 授業力の向上と校内研修との関わり

研修主任等に対しては、「校内研修に関して、どのような工夫をしたか(工夫をしているか)」、教諭に対しては、「校内研修や授業研究を日々の授業力の向上に結び付けるために、どのような工夫をすればよいと思うか」と質問し、両者とも同じ項目から複数回答で選んでもらった。

結果は、次頁のようになった(図7)。

研修主任等と教諭とでは順位に違いはあるものの「同僚性・協働性を高める」「短時間で効率的な研修方法を探る」「視点を絞った授業参観や研究会を行う」「外部講師を活用する」の四つの工夫が上位にあがった。特に、6割以上の研修主任等が「視点

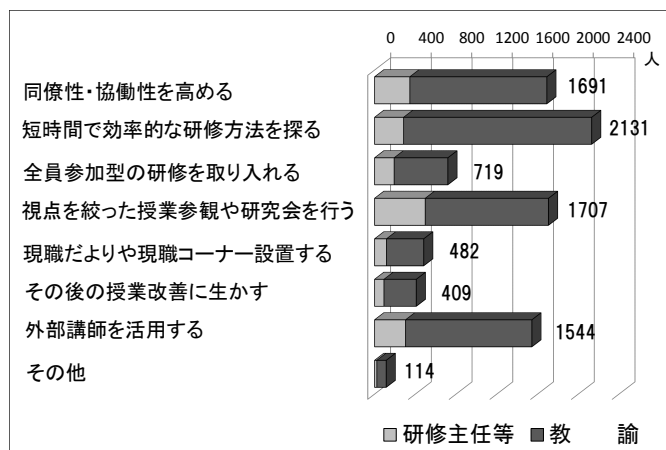


図7 校内研修における工夫

を絞った授業参観や研究会を行う工夫」を、6割以上の教諭が「短時間で効率的な研修方法を探る工夫」を選んでおり、研究協議の焦点化、効率化を図る必要性を感じていることが分かった。

また、教諭に対して、「授業力の向上と校内研修との関わり」から五つの質問を行った。

結果は、次のようになった(図8)。

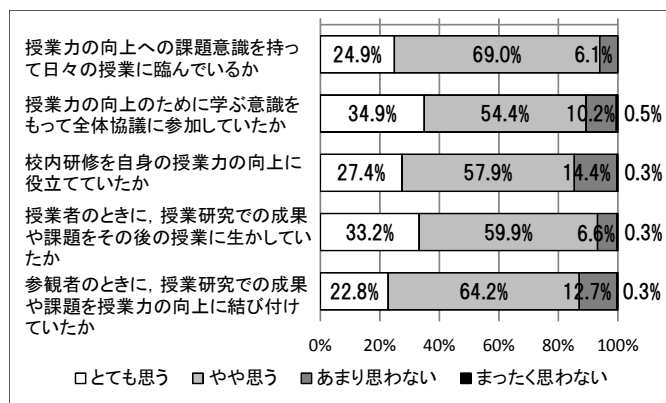


図8 自身の授業力の向上と校内研修との関わり

どの質問とも、肯定的な回答の割合が高いが、「校内研修を自身の授業力の向上に役立てていたか」「参観者のときに、授業研究での成果や課題を授業力の向上に結び付けていたか」の二つの質問に対しては、他の三つの質問より否定的な回答の割合が高かった。

## 2 「授業力の向上に係る校内研修に関する調査」の分析からの提案

教育センターでは、これまで述べてきた調査の分析から、校内研修における課題を導き出した。そして、課題を解決するための方法の提案に焦点を当て、学校の授業研究を教員一人一人の授業力の向上に結

び付けるための効果的な研修の在り方についての研究を進めた。

### (1) 四つの課題

分析から見えた校内研修における課題は、次に示す通りである。

#### ① 自己課題の明確化

授業研究会に臨む際に、研究授業の授業者である場合と授業者でない場合の課題意識に差が見られる。

#### ② 授業研究の改善

時間の確保が難しい状況でも、研究授業の授業参観の仕方、事後研究会の持ち方について各校工夫をしているが、改善が必要だとも考えている。

#### ③ 同僚性・協働性の向上

校内研修を日々の授業力の向上に結び付けるためには、同僚性・協働性を高めることが大切だと考えている教員が多い。

#### ④ 効率化・日常化の推進

校内研修が教員一人一人の日常の授業力の向上と効果的に結び付いていない傾向が見られる。

### (2) 四つの課題の解決に向けて

分析から導き出した四つの課題との関わりから、PDCAサイクルに基づき、校内研修を教員一人一人の授業力の向上に結び付けていけるように、次のような提案を考えた。

- ① 教員一人一人の授業における課題を把握するための授業力チェックシートを活用することで、「自己課題の明確化」「効率化・日常化の推進」を図る。
- ② 授業を見る視点を共有するための事前研究会の持ち方や視点を絞った授業参観、効率的な事後研究会の持ち方を提案することで、「授業研究の改善」「同僚性・協働性の向上」「効率化・日常化の推進」を図る。
- ③ 授業研究を教員一人一人の授業力の向上に結び付けるための振り返りの方法を提案することで、「自己課題の明確化」「授業研究の改善」「同僚性・協働性の向上」「効率化・日常化の推進」を図る。

④ 授業力の向上に係る自己の課題を日常の授業実践につなげるための方法を提案することで、「同僚性・協働性の向上」「効率化・日常化の推進」を図る。

### (3) 提案の詳細

前述した提案を基に、学校の課題研究を個人の授業力の向上に効果的に結び付けることを重視し、各学校において実践できるように、提案の詳細を検討し、構想図にまとめた(資料1)。

#### ① 授業力チェックシートによる自己課題の把握

学校の課題研究を個人の授業力の向上に結び付けるためには、学校の研究テーマの設定段階で、子どもの姿と教員一人一人の授業における課題を加味しながらテーマを設定することが大切になってくる。このことから、『ハンドブック』の授業をつくる16の視点に基づき、自身の授業における課題を明確にするための授業力チェックシートを作成した(資料2)。この授業力チェックシートは、定期的実施することで、日常の授業実践における授業力を測る指標ともなる。

#### ② チーム(小集団)の活用

四つの課題の「同僚性・協働性の向上」や「効率化・日常化の推進」を図るためには、チームを編成し、効果的に活用することが大切である。チームの役割としては、例えば、研究授業の事前研究会では、研究授業者の授業づくりの支援を行い、事後研究会では、ワークショップ型協議のファシリテータとなり、話し合いをリードする。そして、授業研究後の改善授業を相互に参観し合うなどが考えられる(図9)。

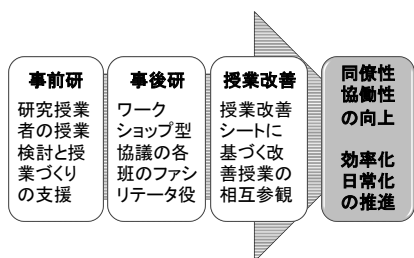


図9 チームの役割

どのようなチーム編成が適切かは、学校種や学校規模によっても違うため、教科別、組織別、年齢別などのそれぞれのチームの利点を考慮し、学校の実態に合わせて編成したり、組み合わせて編成したりするなど各校で判断する(図10)。

	編成	利点
教科別	同教科編成	教科の特質について、共通理解が図れていることが前提であるため、教科の目標の達成に向けて専門的な知見から協議することができる。また、授業づくり以外にも、出品作品の検討や特別教室の管理などにも対応することができる。
	異教科編成	文化系、理科系、技能系などに分けたり、言語に関わる教科(国・英)、社会生活に関わる教科(社・技家)、数式や音符など記号を有する教科(数・音)、実験・体験等に関わる教科(理・体・美)などに分けたりすることで、専門を超えて協議することができる。
組織別	学年・ブロック別編成	子どもの実態を把握したり、学習の系統性や発達段階に応じた指導を考えたりに適している。また、学年会との連携も図りやすく、同僚性の向上、授業研究会の効率化、実践の日常化などに結び付きやすい。
	研究組織別編成	理論、授業研究、環境整備など、全教員を組織に配置することにより、それぞれの内容を深め、所属感・研究意欲の向上を図ることができる。
年齢別	同年齢編成	同年齢であるため、意見などを言いやすく協議が活性化される。協議が深まるため、新しい発想なども出やすく、さらに実践にも結び付きやすい。
	異年齢編成	ベテランの教員が、若手教員に対して授業づくりにおける知識・技能の伝達はもちろん、疑問や悩み、校務の進め方、子どもや保護者への対応などの相談に乗り、知識や経験を伝えることができる。

図10 チーム編成の例

#### ③ 授業を見る視点を共有するための事前研究会と視点を絞った授業参観

「時間の確保」が大きな問題となっているが、事前研究会を省略せずに実施することを提案した。あえて事前研究会を行うのは、事前研究会で授業参観の視点を焦点化することが、事後研究会の効率化につながると考えたからである。また、研究授業者でない場合の課題意識を高めるため、そして、事前研究会をチームで行うことで、同僚性・協働性を高めるためでもある。

前述したように、チームでの事前研究会は、研究授業者の授業づくりの支援を行い、全体での事前研究会は、研究授業者の本時における意図、参観の視点を確認するだけにする。研究授業の参観は、共有された視点に基づき子どもの姿とその子どもに対する教員の関わりを見る形で行う。

#### ④ ワークショップ型事後研究会の実施

研究授業の事後研究会は、教員一人一人の参加意識を高めるとともに、話し合いの内容を可視化・構造化することで協議を深める目的から、ワークショップ型協議が効果的であると考えられる(図11)。今年度、研究協

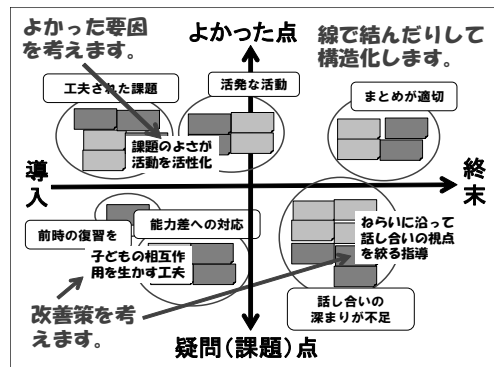


図11 ワークショップ型協議による授業分析

今年度、研究協

力校に提案したワークショップ型協議の進め方は次の通りである。

- ア 縦は「よかった点」と「疑問（課題）点」、横は「導入」から終末へ向かうワークシートを用い、時系列で授業を分析する。  
 イ 色分けした付箋紙に書いた子どもの姿と教師の関わりを、一人ずつ貼りながら説明していく。  
 ウ 同じ内容を○で囲み、小見出しをつける。  
 エ 参観者がよかったと感じた点についてはよかった要因を、課題だと感じた点についてその改善策を話し合う。

### ⑤ 授業改善シートの記入と共有化

各学校で行われている授業研究を自身の授業力の向上に結び付けるためには、授業研究に課題意識を持って参加し、自身の授業を振り返ることが重要である。このことから、研究授業と事後研究会から学んだことや授業改善の具体策を記入する授業改善シートを、事後研究会の最後に5分程度で記入できるように作成した（図12）。

図12 授業改善シート

そして、教員一人一人が作成した授業改善シートを事後研究会で用いたワークシートの下部に貼り付け掲示したり、現職だより等で紹介したりすることで、学校全体での授業改善の意識を高めていくことが大切である（図13）。



図13 授業改善シートの共有

### ⑥ 相互作用による日常化の推進

個人の授業力を向上させるには、授業研究を通して明らかになった授業改善の具体策を実践に結び付ける必要がある。そして、授業改善への取組や振り

返りの日常化を図るには、相互作用を高めることが大切であるとする。これは、自分以外の教員が授業改善の具体策をどのようにとらえ、実践しているかを知ることで、授業力の向上に関して様々な角度から考えるきっかけとなり、教員一人一人の授業改善への意識も高まるからである。教育センターでは、この相互作用をチームで生まれる相互作用と学校全体に広がる相互作用の二つととらえた。チームで生まれた相互作用が、教員一人一人のフレキシブルな相互作用に広がることで、取組や振り返りの日常化だけでなく、同僚性や協働性の向上、そして研修全体の効率化につながるものと期待する。

### 3 研究協力校での実践

8月に研究協力校で、全教員に対して、実践内容について説明と依頼を行った。また、実践の具体策については、前述した構想図に基づいて説明し、年度途中からでも取り入れられる協力内容を確認した。その内容は次の通りである。

- ・ 事前研究会を行って、研究授業者の意図や参観の視点を共有する。
- ・ 共有した視点に基づき、児童の姿を中心に研究授業を参観する。
- ・ 参観の際は、色分けした付箋紙に児童の姿と教師の関わりを書く。
- ・ 記入した付箋紙をもとに、時系列のシートを用いたワークショップ型の事後研究会を行い、協議の焦点化を図る。
- ・ 授業研究を個人の授業力の向上に結び付けるために、事後研究会の最後に授業改善シートを記入する場を設定する。
- ・ 事後研究会で作成したワークシートと各自の授業改善シートを掲示したり、現職だより等で紹介したりするなどして相互作用を高める。

教育センターの提案を取り入れた研究協力校の実践の一部を以下に述べる。

#### (1) 事前研究会と研究授業

研究授業を参観する際に、より視点を明確にするために研修主任と協力して授業参観シートを作成した（図14）。このシートは、研究協力校の研究主題

に迫るための三つの手だてに基づいて、事前研究会で共有化を図った視点を記入したものである。授業を参観する際に、授業者が講じた様々な手だてが、児童の学びに効果的であったかを見るために、児童の姿で具体的に示すことで、参観の視点を明確にした。

授業を見る視点	子どもの学びの様子・教師の支援		課題解決の方法
	よかった点	疑問点(課題)	
①自分の考えをもつことができていたか ・図に線や矢印を書き入れたり、式や言葉で説明を書いたりして、自分の考えをノートに記述することができたか	事前研で共有化を図った視点を記入する。		授業を見て、課題だと思った部分の解決策を書く。
②他との関わりにより、考えを深めることができていたか(多様な方法への気づき) ・自分とは違う考え方をした友だちの図を読み、解決方法を考えて式に表すことができたか ・自分とは違う考え方をした友だちの式を読み、解決方法を考えて図に表すことができたか	子どもの姿 教師の関わり	子どもの姿 教師の関わり	
③わかりやすく伝えることができていたか(多様な方法の説明) ・学び合いを通して多様な考え方を身に付け、はじめても自分の考えとは違う考えについて、筋道立てて説明することができたか	各視点に基づき、子どもの姿がどうだったかを、よかった点と課題点から見取り、付箋紙に書く。同時に、見取った子どもに教師がどう関わったのかも付箋紙に書く。		
その他	参観者の授業改善の具体策から、気付いたことを書く。		

図14 授業参観シート

## (2) 事後研究会

ワークショップ型協議で用いるワークシートには、時系列型、座標軸分割型、マトリクス型など様々なものがある。どのようなワークシートを使うかは、ワークショップ型協議を行う協議班の構成や協議の内容などにより使い分けされるが、研究協力校においては、研究主題・副主題に迫るための手だてが、授業の展開とリンクしているために、時系列型のシートを用いた(図15)。

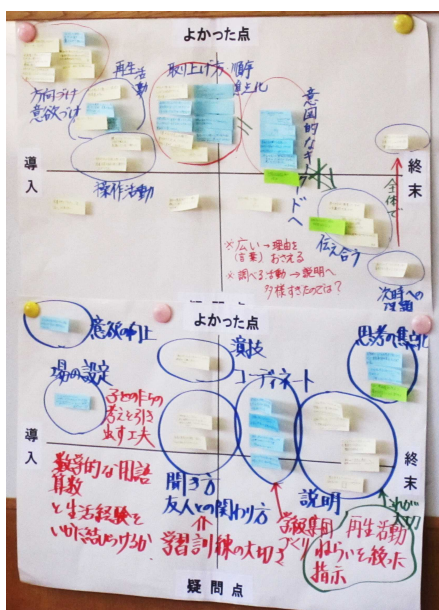


図15 二つの班のワークシート

事後研究会は、ワークショップ型のチーム別協議で30分、全体でも45分程度で進め、授業改善のポイントをまとめるようにした。30分という限られた時間の中で協議の焦点化を図り、最大の効果をあげるために、協議の進め方を次のように提案した。

- ① 30分のうち、付箋紙を貼る時間を10分、協議する時間を20分とする。

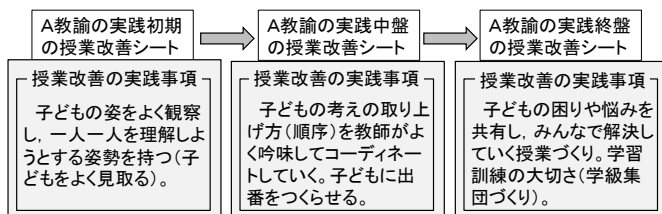
- ② 付箋紙に書いた内容のうち優先順位の高いもの、または、事前研究会で共有した視点の中でも核となるものから貼り、簡潔に説明する。
- ③ 班員は、一人目の教員が説明したことと同じ場面(瞬間)について書いてある付箋紙があれば貼り、同じように簡潔に説明する。
- ④ 付箋紙に書いたことを説明している間は、協議はしない。
- ⑤ 付箋紙を貼る段階で、授業のポイントが絞られているので、重要な部分から協議する。
- ⑥ 必要に応じて、付箋紙を付け足したり、マジックで書き込んだりして、協議したことが残るように話し合う。
- ⑦ 残り1分になったら協議をやめ、手元に残った付箋紙を貼る。

このような事後研究会の進め方に研究協力校の教員は、次のような感想を述べている。

- ・ 事後研究会では、ポイントを絞って話し合われたので、とても分かりやすく、改善の具体策も講じられたと感じた。
- ・ ポイントを絞った話し合いをすることができ、有効な話し合いの進め方についてもヒントを得ることができたように思う。

## (3) 授業改善シート

学校の課題研究と個人の授業力の向上を効果的に結び付ける研修の在り方を提案することが、本研究の目的であるため、事後研究会の最後に記入する授業改善シートは、大きな意味を持つようになる。研究協力校のA教諭が書いた授業改善シートの授業改善の実践事項は次の通りである。



A教諭は、初期の段階から授業中のコーディネートを授業改善の実践事項にあげており、3枚のシートには、「子どもをよく見取る」「意図的指名を行う」「受容的・共感的な学級集団づくり」について

記入されている。A教諭は、授業研究を通して、適切にコーディネートするための新たな視点に気づき、回を重ねるごとに視点を増やすことができた。このことから、授業改善シートを用いることにより、個人の授業力の向上における課題と授業研究を効果的に結び付けることができたと言える。

#### IV 研究のまとめ

##### 1 研究の成果

(1) 今年度は、「授業力の向上に係る校内研修の在り方」を研究主題に設定し、方法の提案を中心に研究を進めてきた。校内研修の実態調査の結果と分析から、四つの課題を導き出し、課題解決に向けた提案を行うことができたのは大きな成果であるとする。

(2) 年度途中からの協力体制となったが、研究協力校の教員からは、次のような感想が聞かれた。

- ・ 授業者だけでなく、参観者も一緒になって一つの授業をじっくり考えることができた。
- ・ 子どもの考えをしっかりと見取り、子どもの発言を全体に広げたりつなげたりする教師のコーディネートが大切であると学んだ。
- ・ 事後研究会では、話し合うための視点が焦点化され、深まりが感じられた。

また、研究協力校の教員には授業研究ごとに、提案した方法の有効性や個人の授業力の向上への効果について、アンケートに答えてもらった。実践の前半と後半を比較して、肯定的な意見が著しく増えているのが、次の項目である（図16）。

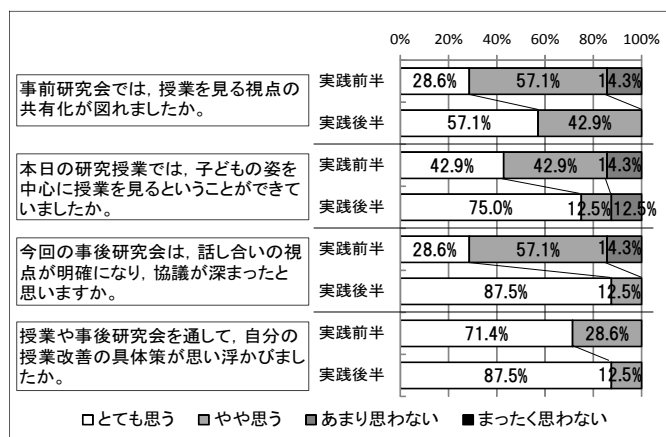


図16 研究協力校へのアンケート結果（成果）

研究協力校の教員の感想及びアンケート結果から、授業力の向上に向けて、校内研修、特に授業研究を活性化させる方法や学校の課題研究と個人の授業力の向上とを結び付ける方法を提案できたと考える。

##### 2 今後の課題

(1) 研究協力校で実施したアンケートで、否定的な回答は少なくなっているものの、課題とすべき質問は、次の項目である（図17）。

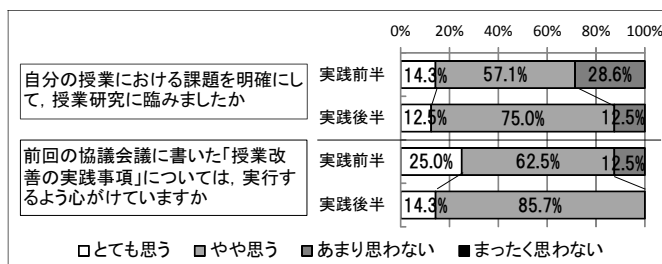


図17 研究協力校へのアンケート結果（課題）

この結果から、次の課題が浮かびあがった。

- 研究協力校では実践できなかった授業力チェックシート等の活用により、自己課題の明確化を図り、授業研究を自身の授業力の向上に結び付けることができるようにする必要がある。
- 授業研究を通して見えた授業改善の実践事項を、日常の実践につなげる効果的な手だてを構築する必要がある。

(2) 今回提案した方法が、各学校において活用されるためには、各学校の実態に合ったものであることが重要になる。各学校が様々な実態に応じて活用できる具体的な方法を提案する必要がある。

〈参考・引用文献〉

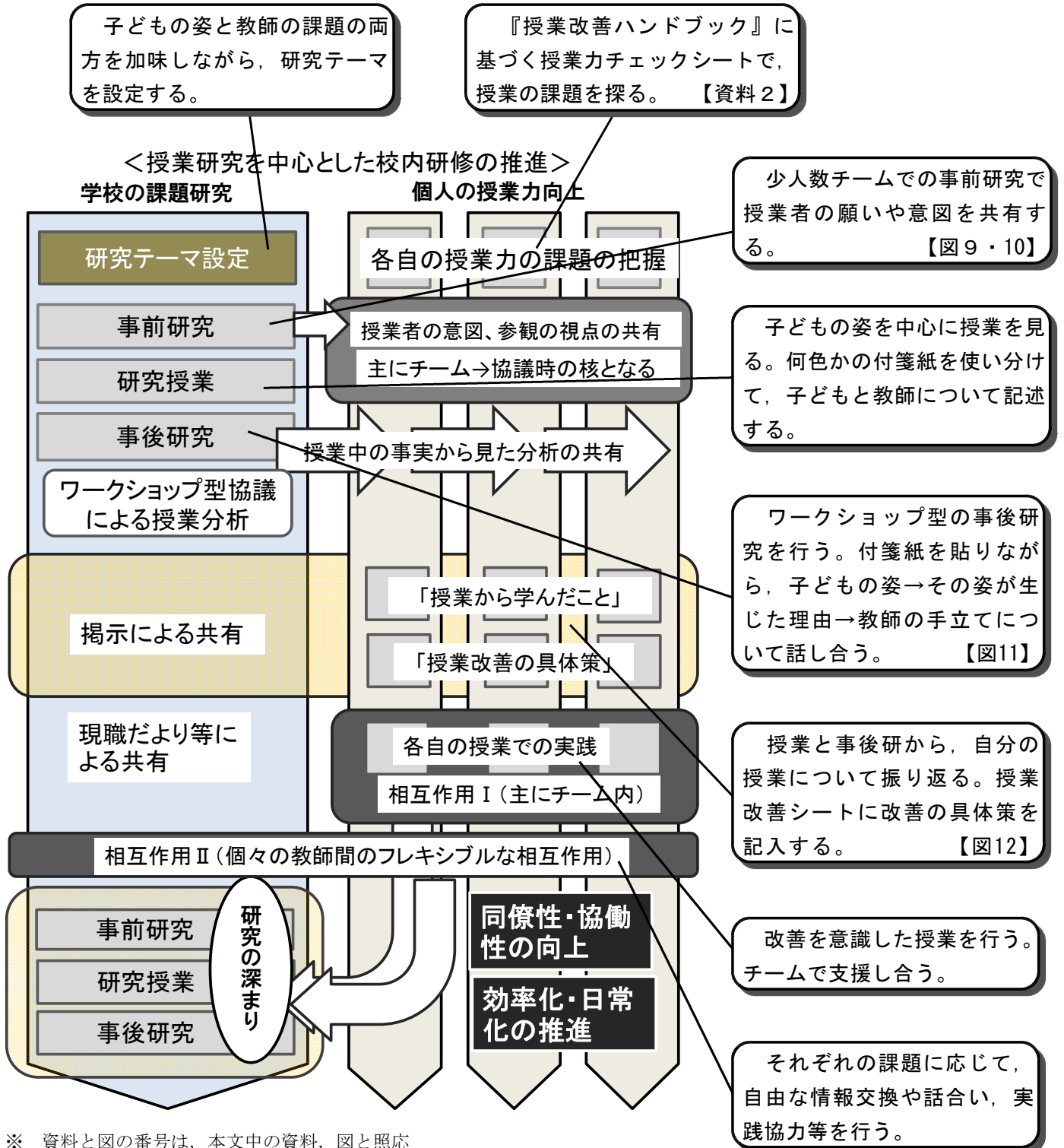
- 1) 授業改善ハンドブック 新・授業の窓「授業をつくる16の視点」  
(福島県授業改善研究会 2013年)
- 2) 校内研修のてびき【小・中学校版】  
(長崎県教育センター 2013年)
- 3) 授業力を高める校内研修の進め方 プロジェクトによる研究《平成22・23年度》概要版  
(鹿児島県総合教育センター 2011年)



資料 1

下の図は、主に、一つの研究授業から次の研究授業までの間の流れを説明したもので、左側が「学校の課題研究」の流れを、右側が「個人の授業力の向上に向けた取組」の流れを表している。

研究授業の参観及びその後の協議によって、授業改善のヒントをつかみ、自分の実践に生かしていくことを繰り返していく。その中で、「同僚性・協働性の向上」「効率化・日常化の推進」が期待される。また、個々の教員の力量が増せば、同時に、学校の課題研究についても、深まりが期待できると思われる。



※ 資料と図の番号は、本文中の資料、図と照応

## 資料 2

### 授業力チェックシート

氏名 ( )

#### Ⅰ 単元をつくる

- 1 **ねらいを明確にする**
- (1) 初めから教科書通り、教師用指導書通りではなく、自分なりにねらいや活動を考えようとしている  1  3  5
- (2) 身に付けさせたい力は何か、そのためにどのような指導をするのか意識して、内容の配列や時間配分を考えている
- (3) 既習の学習内容や中学校の学習との関連や教材の系統性をふまえている
- 2 **子どもの実態を把握する**
- (1) 関連する既習事項の理解度や学習内容への興味・関心の程度を把握している
- (2) 小学校(中学校)でどのような活動を通して学んできた(学ぶことになる)のか把握している
- (3) 子どもの、学習内容に関連する過去の体験や日常生活での経験を把握している
- 3 **単元全体を見通した計画を立てる**
- (1) 教材研究を行い、教材の本質や特性をふまえた学習ができるようにしている
- (2) ねらいの達成に最もふさわしい活動になるように工夫している
- (3) バランスのとれた評価が計画的に行われるようにしている
- 4 **言語活動を組み入れる**
- (1) 教科料の特質を踏まえた言語活動を位置付けている
- (2) 必然性のある言語活動がなされるよう、単元の展開を工夫している
- (3) 「読む」「書く」「聞く」「話す」のそれぞれを意図して位置付けている

#### Ⅱ 授業をつくる

- 1 **よい学習課題を設定する**
- (1) 追究する価値の高い、本質的な内容につながる課題となるよう吟味している
- (2) できるだけ教師から与えるのではなく子どもから引き出そうとしている
- (3) 実物、実演、ICTの使用など追究意欲のわく課題提示の方法を工夫している
- 2 **ねらいとまとめの整合性を図る**
- (1) ねらいの段階から、学習後に実現された子どもの姿を具体的に想定している
- (2) ねらいをもちに、子どもが目的意識や見通しをもつことができるめあて(課題)を設定している
- (3) 「何がわかったのか」「何ができるようになったのか」が明確になるようなまとめ方をさせている
- 3 **「共有」と「吟味」の活動を入れる**
- (1) 授業の中で何を共有させるか焦点化し、そのことについて一人一人に自分の考えを持たせられるように工夫している
- (2) 共有や吟味が効果的に行えるよう、学習形態や話し合いの方法等を工夫している
- (3) 話し合ったことをもとにしてもう一度自分で考える時間を設けている
- 4 **振り返りの場を設定する**
- (1) 子ども自身の表現で本時のまとめを書かせるようにしている
- (2) 何が分かって(できて)、何がわからなかったか(できなかったか)を子ども自身が自覚できるようにさせている
- (3) 自己評価、他者評価、相互評価を計画的に取り入れられている
- 5 **基本的な授業要素を踏まえる**
- (1) 事前に板書案をたてるなどして、構造化された板書をしている
- (2) どのような子どもの姿を具現したいのかを明確にして、適切な発問をしている
- (3) ノートの書き方の約束を決めてあり、継続的にノート指導を行っている

#### Ⅲ 授業を進める

- 1 **子どもの姿を見取る**
- (1) 授業中のあらゆる場面で、可能な限り個々の子どもたちの姿を見取るよう努力している  1  3  5
- (2) 子どもの個人の活動場面では初問指導を行い、適切な支援を行っている
- (3) 自分の授業以外でも、子どもの姿を多角的・多面的に捉える努力をしている
- 2 **子どもの考えや発言をコーディネートする**
- (1) 最終的に引き出したい考えや発言を具体化し、明確にしている
- (2) 授業中、子どもの理解度や考えを把握しながら、次の展開を構想している
- (3) 子どもの発言に対し、すぐに教師が説明したり結論づけたりせずに、全体に広げたり、つなげたり、戻したりしている
- 3 **個々の子どもに対応する**
- (1) 個人差があることを当然と受けとめ、実態に応じた指導を心がけている
- (2) 学習進度の速い子、遅い子への支援の方法を考えている
- (3) 学級の中で特に配慮が必要な「あの子」への支援の方法を考えている
- 4 **学級集団づくりを意識する**
- (1) 子どもは間違えながら成長する、最初からはできないのがあたりまえという意識を持って授業を進めている
- (2) 学習についてのルールを明確に示し、必要に応じて毅然とした態度で指導している
- (3) 授業中、子どもに対し、ほめたり、認めたりする言葉を多くかけている

#### Ⅳ 授業を振り返る

- 1 **子どもの姿を振り返る**
- (1) 授業が終わった後に子どもと授業の話をしたり、後で授業中の子どもの姿を振り返ったりしている
- (2) ノートやワークシートを提出させて、理解度を把握しその後の授業に生かすとともに、朱書きなどで指導している
- (3) 座席表や個人カルテ、録音などで継続的に子どもの姿を捉えようとしている
- 2 **授業展開を振り返る**
- (1) 自己評価表など、自分なりに指標を持って授業を振り返っている
- (2) 校内研修の授業研究に意欲的に参加している
- (3) 自主的に誰かに授業を見てもらうなど、第三者と授業を振り返ることを積極的にしている
- 3 **宿題やテストとのつながり考える**
- (1) 授業の学びが生きた宿題や学習課題につながる宿題など、授業と宿題のつながりを意識して宿題を出している
- (2) テストの後、解答の分析を行い授業に活かしている
- (3) 全国学力学習状況調査や福島県版学力テストなど子どもが受けるテストの問題を解いてみて授業づくりに活かしている